

2025年3月9日

山内尚子

このたびは私の大切な友人への正当な評価、表彰に感謝します。

類子さんの40年来の友人として、彼女がいかに受賞にふさわしいか、原発事故が起きるずっと前から一貫していた彼女の姿をお伝えしたいと思います。

「恵みの雨」という意味を持つ、慈雨という息子の名付け親は類子さんです。彼女に出会わなければ今の私はいません。それ以上に、今の福島の前原運動はなかったでしょう。

私が類子さんと初めて会ったのは、県立学校教員採用試験の会場でした。面接の順番を待っていると、小さなアルバムを示しながら「私が作った教材ご覧になる？」と話しかけてくる赤いニットスーツ姿の人がいました。誰もが暗い色の服を着て緊張して孤立している中、教材よりもその行動が強く印象に残りました。その後、合格者の研修会で再会して親しくなり、教育思想をはじめ、本や、人脈などを共有し、勉強会をしたり先進的な学校を見に行ったり、コウ・カウンセリングを学んだりして互いの信頼を深めました。

同じ養護学校に勤務した8年の間、2人で「原発止めよう、風の会」を作り、手書きの「風のしんぶん」を交代で発行しながら、様々なアクションを続けました。

- ・トラブルを起こした原発の運転再開に抗議するリレーハンスト。
- ・核燃料輸送を住民に知らせるチラシポスティングやトラックの追っかけ。
- ・核廃棄物が青森県に初めて搬出される際の「よそに回すな、核のゴミ宣言」。
- ・ストップ プルトニウム キャンペーンとして、全人類の致死量3gのプルトニウムに見立てたスティックシュガーやミニドラム缶の街頭配布。
- ・六ヶ所村や東海村でのキャンプや座り込み。
- ・MOX燃料装荷に反対するダイイン。
- ・色々な人を招いての講演会や集会、映画上映会の開催。

…等々、いつもそれらはグリーンナムコモンの女性達に連なる「非暴力直接行動」が基本で、元気の出る楽しいものでした。私が育児や親の介護で運動から遠ざかっている間も、類子さんは東電との交渉をはじめ、六ヶ所村までのセイクレッド・ラン、福島原発40周年ハイロアクションなどを続けていました。

職場では私たちがエスニック調の服やもんぺ姿でいたことと、市民運動への偏見から「教員のくせに」などと批判されましたが、子ども達と一緒にハーブを育てて加工したり、研鑽を積んで日本の民俗芸能を教えるなど、障がいを持った子ども達との共生と対等を目指して、ちゃんとした良い授業をしてきたと思っています。

その後チェルノブイリ事故が起こり、憂慮してきた日本の原発事故が現実のものとなりました。しかも自分のところで…。事故当時の私は県内最大の養護学校に勤務していて、その学校が原発現地からの一次避難所になりました。地震直後に類子さんから「尚ちゃん、逃げて！」とのメールをもらいましたが、学校職員は避難民への炊き出しや、トイレの水運び、物資の管理・配給などが業務になりました。妊娠中の同僚を逃がしたくて校長に直談判に行

くと「逃げて良いのは富岡養護だけだ。逃げたら免職だ！」と言われました。もちろん、そんなことを言われなくても、不安と恐怖を押し殺すには今いる場所で同僚と助け合うことしかできなかつたのです。

その後の類子さんの活躍は皆様ご存じの通りです。「国と東電幹部を刑事告発しよう」という類子さんからの呼びかけに応じて、私はまたこの運動に戻れたのです。

私個人としては、福島原発事故さえなかったら彼女はこれほど忙しくも、体調を崩すこともなく、一緒にのんびり過ごしたり旅行したりできたのに…と恨めしく思うことがあります。でも、類子さんの賢さとしなやかな強さが、今この世界に必要なのだと理解してもいます。そして、その現場に友人として同伴させてもらえることを誇りに思っています。

類ちゃん、これからも一緒に、諦めずにこの世界を変えていこうね。